

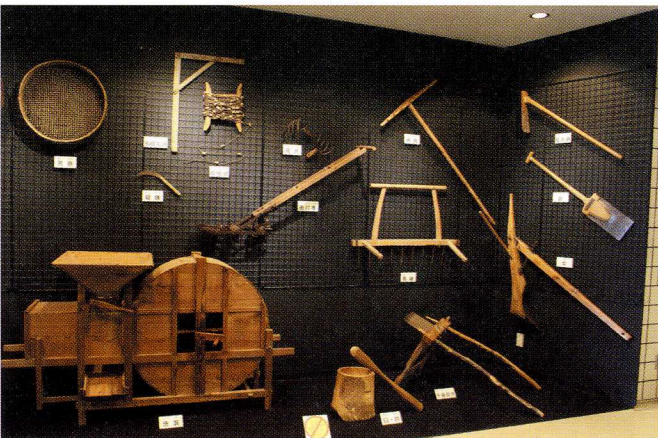


常設展示 農機具コーナーのリニューアルをしました!

当館では現在3000点近い民具を収蔵しています。民具は「日常生活を営む中で必要とされた道具」で、大正時代に本格的に研究が始まりました。同じ道具でも地域によって呼び方、使い方、使用時期は様々ですが、機械化が進んだ現在では見る機会が少なくなりました。民具のほとんどは昭和30年代頃まで当然のように使用していた道具だったため、今でも文化財という認識が少ないのが現状です。しかし、使われなくなった民具に使用者の体験や思い出が加わることによって、その文化財価値が高まります。そのため、歴史研究では過去の史料にも残らない、庶民の生活を理解するための有形資料としてその価値が位置付けられています。

今回展示している農機具は、すべて大分市内の方々から寄贈を受けた米作りの道具です。牛馬の力を借りて、田を耕し、人の手で苗を植え、雑草を除去、稲を刈り、脱穀をする。これらの工程すべてに道具が存在します。昔のような感じがしますが、市内でも機械化の始まる昭和30年頃までは日常の光景でした。例えば、代表的な道具に馬鎌(マンガ)があります。地域によってはマグワ、マーガと言われ、牛馬に引かせ、田の代掻きを行う道具です。大きな鉄の櫛に鳥居形の持ち手をつけた形をしており、江戸時代の農耕図にも現在のものと変わらない形で描かれている古くからある道具です。市内では一般的に馬より牛に用いたようで、その鳴き声から「モーガ」とも呼ばれていたようです。

現在、このような農機具をはじめ、生活に使用していた民具の収集は難しい時代になってきました。倉庫に眠っているような昔の道具などがあれば是非、資料館にご連絡ください。また、農機具コーナーの横には皆さんの道具に関する思い出を書いてもらうアンケートを用意しています。使った記憶、見た記憶、聞いた記憶。道具に関するさまざまな思い出を聞かせてください。みなさんの思い出が民具の情報となり文化財としての価値を一層高めます。



利用案内

- 開館時間 9時から17時(入館は16時30分まで)
- 休館日 月曜日 但し祝日の場合は開館 但し第1月曜日は開館し、翌火曜日が休館日 祝日の翌日 但し土・日曜の場合は開館 年末年始 12月28日～1月4日

- 観覧料 大人200円(団体150円) 高校生100円(団体50円) 中学生以下 無料 ※団体は20名以上 ※身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳の交付を受けている方とその介護者は無料。 ◎入館時に受付で手帳を提示してください。 ※特別展開催中は別料金となる場合があります。

- 交通機関
 - ・JR久大本線 豊後国分駅下車 徒歩2分
 - ・大分バス[国分新町ゆき] 歴史資料館入口下車 徒歩5分
 - ・大分自動車道 大分IC・光吉ICよりともに約15分

発行日：平成23年4月23日

発行：大分市歴史資料館 〒870-0864 大分市大字国分960-1 TEL097-549-0880 Fax097-549-5766
 ※大分市ホームページの「観光・魅力」歴史・文化財「歴史・文化を学ぶ」大分市歴史資料館」も併せてご覧下さい。
 (http://www.city.oita.oita.jp/)



ふれあい歴史体験講座

- 定員 各回70名程度(先着順)
- 時間 午前の部 9時30分～(約2時間) 午後の部 14時00分～(約2時間)

	実施日	内容	時間	材料費	受付開始日
第2回	5月14日(土)	土笛作り	午前のみ	50円	4月19日(火)
第3回	5月28日(土)	勾玉作り	午前・午後	200円	5月7日(木)
第4回	6月11日(土)	土偶作り	午前のみ	170円	5月20日(金)
第5回	6月25日(土)	管玉・丸玉作り	午前・午後	260円	6月8日(水)
第6回	7月9日(土)	勾玉作り	午前のみ	200円	6月21日(火)

- 応募 上記の受付開始日より、電話にて応募ください。(大分市歴史資料館：097-549-0880)

昔のおもちゃで遊ぼう

- 内容 歴史資料館隣の広い史跡公園で、竹馬・竹とんぼコマなどの昔のおもちゃで、思い切り遊びます。

- 日時 5月5日(木)【こどもの日】 9時～16時(15時受付終了)

- 料金 無料 ※事前の申し込みは必要ありません。

七夕飾りを作ろう

- 内容 短冊に願いごとを書いて、みんなで七夕飾りを作っていきます。

- 日時 7月2日(土) 9時～16時

- 料金 無料 ※事前の申し込みは必要ありません。

ミュージアム・シアター

- 実施日 (●大人向け◎子ども向け)

- 5月22日(日) ●大友宗麟 九州戦国物語 [九州街道物語] 豊後王大友宗麟 [フレッシュ大分] ◎まんが日本昔ばなし 「座敷童子」「ナマズの使い」
- 6月26日(日) ●大友宗麟 ザビエルの歩いた道 [九州街道物語] 大友宗麟と西洋文化 [フレッシュ大分] ◎まんが日本昔ばなし 「七夕さま」「さだ六とシロ」

- 時間 13時～14時

- 料金 無料 ※事前の申し込みは必要ありません。

テーマ展示解説講座

- 内容 講座室でテーマ展示Ⅰ「豊後南蛮交流史」について、スライドなどで解説します。

- 日時 5月22日(日) 14時～15時30分

- 参加費 無料 ※事前の申し込みは必要ありません。

大分市歴史資料館

OITA CITY HISTORICAL MUSEUM

ニュース



大分市歴史資料館 テーマ展示Ⅰ

豊後南蛮交流史

4月23日(土)～7月4日(月)



豊後南蛮交流史 会期：4月23日(土)～7月4日(月)

南蛮人と呼ばれたポルトガル人と、大分の人々との出会いは、種子島に鉄砲が伝来してから、わずか2年後の1545年のことです。宣教師の記録によると、大友宗麟の証言として、この年に中国船に乗った数名のポルトガル商人が豊後府内(今の大分市)に上陸し、ある者は3年間も当地に滞在していたことが記されています。その後、1551年に宗麟の招きでフランシスコ・ザビエルが豊後府内を訪れ、これをきっかけにポルトガルとの本格的な交流が行われるようになりました。本テーマ展では、宣教師たちの記録をもとに、大分とポルトガルとの交流の歴史と、これにともない花開く豊後の南蛮文化の様相を紹介します。

1 ポルトガル商人が豊後へやって来た

宣教師たちの書簡の中に、大友宗麟が昔の出来事を語った次のような内容が記されています。そこには「予が十六歳の時、父なる国主(大友義鑑)と共に府内の市にいた…その頃府内近くの港にシナ人のジャンク一艘が、六、七名のポルトガル商人を乗せてやってきた」こと、また「シナから日本へ定航船が来航するようになった当初、一人のポルトガル人が三年間予の庇護のもとにあり、彼は予の兄弟である山口国主(八郎晴英、後の大内義長)が鉄砲により一方の腕に受けた傷を治療した。予は絶えず本心を覚られぬよう隠して、彼にポルトガルとインドの状況や政治、特に修道士の規則と生活について詳しく尋ねた」ことが述べられています。これらの記述から、ポルトガル人が初めて豊後府内へ来航したのは、宗麟の生まれた1530年(享禄3)から数えて15年後の1545年(天文14)のことであり、また宗麟が一人のポルトガル人を3年間豊後府内で庇護し、鉄砲をはじめポルトガルやインドの政治状況など、西洋の文物についての知識や情報を得ていたことが分かります。

2 ザビエル、豊後を訪ねる

ザビエルは、「コスメ・デ・トーレス神父とファン・フェルナンデスと私とがまだ山口の町にいた時に、非常に有力な領主である豊後侯から、一隻のポルトガル船が豊後の港に着き、あることについて私と話したいので、来てほしいとの手紙が届きました。私は【豊後の領主が】信者になることを望んでいるかどうかを見極めるため、またポルトガル人に会うために豊後へ行きました」と、宗麟から豊後へ招待された経緯を自身の書簡に記しています。また、宗麟が1551年(天文20)9月に府内に到着したザビエルを「たいそう歓迎」し、さらに府内に2か月余滞在した後、インドへと旅立つザビエルに対して「ポルトガル王の偉大なことをよくご存知で、国王と親善を結ぶため、書簡を書き、友愛のしるしとして武具一揃いを持たせ、インド副王に新愛の情を捧げるために家臣を派遣」したことも記されています。



南蛮兜
西洋から日本に伝えられた兜を模して作られたもの。



口絵に描かれたザビエルの肖像画
『東洋の使徒 フランシスコ・ザビエルの生涯』

3 府内教会の建設と西洋文化の移入

インド副王あての書簡には、「創造主の教えを説くため渡来する司祭らを領内に迎える」とする宗麟の意思も記されていました。この宗麟の書簡に応え、1552年(天文21)9月にガゴ神父らが府内に来航し、あわせて「インドの副王からの贈物である板金製の胴衣一着と、そのほかの品々を持参」しました。翌1553年7月に宗麟がガゴ神父らに与えた府内の地所に「豊後の慈悲の聖母の修道院」と名づけられた教会が建てられました。教会では、「日本人とシナ人の少年十五名に読み書きや歌、ヴィオラ」などが教えられ、ミサや祝祭では少年たちによって歌や楽器の演奏が行われました。府内から発信された宣教師の書簡によると、「日本へ渡来した事物の内、日本人がもっとも好んだこと(の一つ)はオルガン、クラボ、ビオラを演奏すること」とあり、特に日本の教会にあるオルガン二台のうち、一台が「豊後に所有」されていたと書かれています。1581年(天正9)、府内教会は、巡察師ヴァリニャーノの強い要望によって、イエズス会の「修道士らが勉学を続け、修練所を出た者が年齢と時間の許す限り在学する」ための学院(コレジオ)とされ、また臼杵の教会には「ポルトガル人および日本人で最近入会を望んでいる人を迎えるため」の修練院(ノビシャド)が設けられました。「サン・パウロ学院」と名づけられた府内コレジオでは、「ラテン語の授業ほかにも毎日、日本語の授業」も行われました。

4 大友宗麟、キリシタンとなる

大友宗麟は臼杵の教会で1578年(天正6)7月、カブラル神父によって洗礼を受け、フランシスコという教名を授けられました。フロイスの『日本史』によれば、その教名は、宗麟が生涯で最初に会った宣教師フランシスコ・ザビエルの名前こそがふさわしいと思い決めたとあります。キリシタンとなった宗麟は、この年9月に海路、日向へ進軍を行いました。フロイスの書簡には、宗麟の乗った大きな船には「白い緞子に赤い十字架と錦糸で飾りを付した旗と多数の十字架の軍旗」が掲げられ、「同乗した武士は老いも若きも皆、コンタツを携え、頸に影像を懸けていた」とあり、宗麟をはじめその周辺の人々の間にキリスト教の影響が色濃くなっていきました。

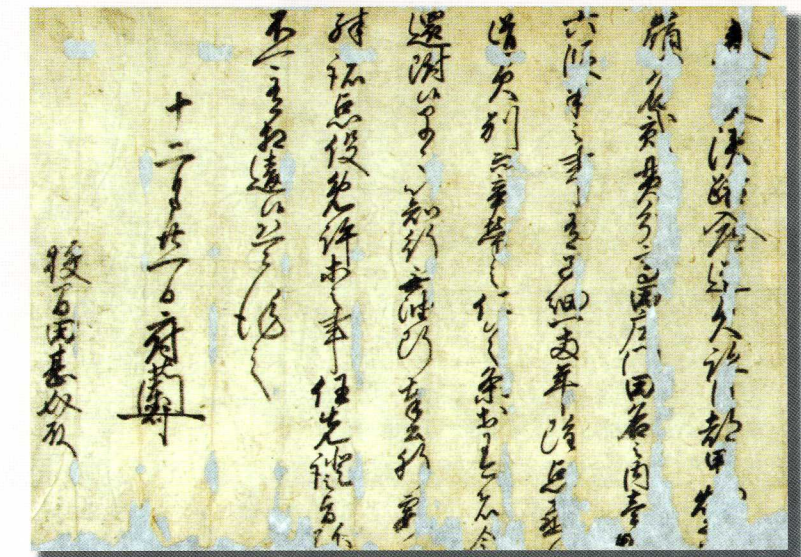
表紙 『日本の花束』(アントニオ・カルデイルム著1650年版)の中に紹介された大友宗麟像



黒いマントを身にまとったイエズス会の宣教師の一行
(南蛮屏風 模写/現品 神戸市立博物館蔵)



府内コレジオの図『グレゴリオ13世伝』



宗麟がキリシタン名で署名した書状
教名フランシスコの頭3文字「フラン」を、「府蘭」の漢字2文字で表している。